

【特 集】

新型コロナ対応で生じた 2020 年度前学期遠隔授業の取り組み —健康スポーツ科学科とハワイ大学マノア校 Kinesiology and Rehabilitation Science 学科—

菅嶋康浩*¹ Yukiya Oba*² Kaori Tamura*² 山本英弘*¹ 竹島伸生*¹

I. はじめに

世界中で新型コロナの感染が蔓延し、人類の危機が生じているといわざるを得ない今日となっている。2020年3月27日に岐阜県知事から本学への新型コロナウイルス感染症の拡大防止に関するメッセージが出され、その後、4月8日には「県緊急事態宣言」が発令された。それを受けて、本学は4月2日に大友克之学長より学生ならびに教職員に対する感染防止に関するメッセージを発表し、“不要不急の移動の自粛等、そして各自がより慎重な行動をとること”についての指示が出された。そして、23日に2020年度前学期授業の実施に係る方針（当面）が発表された。以下の内容であった。

- ①学生、教職員、そして地域社会への感染リスクを最小限に抑えるため、対面による授業を行わないこと、
 - ②2020年度前学期授業については、原則として全学部において遠隔授業（オンライン教育、オンデマンド方式）を実施すること、
 - ③実習・演習等については、密閉、密集、密接の“3つの密”を徹底的に回避したうえで、活動の前後2週間以上の行動確認を必ず行うこと、
 - ④国内、県内の状況が変化した場合には、本方針を適宜見直すこと、
- の主な4点であった。

この授業方針を受けて、本学科の対応を検討したところ、講義科目を除くスポーツ実技、実験実習、ゼミ等の演習科目の授業は当面中止とならざるを得ないという決定に至った。また、4月30日の時点において新型コロナウイルスの感染状況は収まらず、さらに“5月31日まで対面授業の中止を延長する”方針の修正が発表された。このように全国、岐阜県における新型コロナウイルスの感染が蔓延する状況に陥り、朝日大学キャンパスは実質閉鎖に近い状況となり、遠隔授業のみを展開することとなった。

その後、新型コロナウイルスの感染状況が収まるような状況と判断され、5月14日に「岐阜県緊急事態宣言」が解除された。岐阜県教育委員会から「学校における新型コロナウイルス感染症対応<学校再開ガイドライン>」が示され、本学はこのガイドラインに沿った状況で次の対応を展開した。5月20日には“感染リスクを最小限とするため、前学期の間、引き続き遠隔授業を継続すること”、“3つの密を徹底的に回避するなどクラスター発生リスクを下げ、実験・実技・実習等を含めた一部授業科目を順次実施すること”の方針の再度修正を打ち出した。

このように、新型コロナウイルスの感染状況の変化に対する本学科における授業対策は、前例のない手探りで作成され、現在に至っているが、いまだに新型コロナウイルスの感染は止まず、海外では2次、3次の感染拡大が憂慮されている。今年度の入学式も中止となり、1年生はキャンパスに通うことなく、遠隔授業のみを経験することから学生生活が始まるという未曾有の中で、いかに教育の質や量を確保していくのかという課題が山積しており、今後の見通しも大変不安な状況に陥っている。

朝日大学は、これまで米国ハワイ大学マノア校と2018年学術協定に基づく教育研究の交流を図っている

受付日 2020.11.21

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

*2 Kinesiology and Rehabilitation Science Department, College of Education, University of Hawai'i Manoa

が、その中心は健康スポーツ科学科とハワイ大学マノア校 Kinesiology and Rehabilitation Science 学科との間で強い協力関係が生まれている。

そこで、本稿では全ての大学が対面授業と遠隔授業の実施が要求されているが、スポーツ科学においては講義、実技、演習など授業の様式が多岐に亘るため、コロナ禍における両学科の授業の現状と課題を検討し、その中からポストコロナの授業のあり方について考えてみたい。

II. 2020年度本学科の授業について

全国の大学では、A：リアルタイムのオンライン授業：Web会議システム（Zoom等）を活用し、配信される講義や双方向の議論を通して学ぶ、課題や小レポートなどによる学習の理解度チェックや質疑、学生同士の意見交換などの授業形式」（同期型）、B：オンデマンド配信の授業：講義動画を視聴し、課題や小レポートによる学習の理解度チェックや質疑を行う授業形式」（非同期型）、およびC：教材提示による授業（非同期型）などの様式が存在している。

本学では、学長から前学期は、B：オンデマンド配信の授業：講義動画を視聴し、課題や小レポートによる学習の理解度チェックや質疑を行う授業形式」（非同期型）を行うという意向があり、本学科においても本様式の導入を図った。

このように、2020年度当初予測できない新型コロナウイルスの感染拡大状況下で、まず「講義」のみの遠隔授業が始まった。学内では、経営学部矢守恭子教授と曾我部雄樹准教授は、学長の要請を受けてオーガナイザーとして遠隔授業推進のために教職員および学生のために学内のネット環境、システムなどの整備に加えて、関係する教職員は授業実施に対して度々の講習会や著作権への配慮や遠隔に使用する資料作りなど細かな指導を主導した。その結果、情報科学などの詳細やコンピュータに慣れていない場合には相当の労力と苦勞が生じたことは言うまでもないが、徐々に遠隔教育の実施に慣れてきたものとみられた。

しかし、教員も学生も過去に実施した経験のないために配信する授業のパワーポイント等の資料作りや、配信資料の中で配信できる情報とできない情報（例えば著作権等の侵害の危険性など）の判断や受講する学生の受信状況とフィードバックに対して日々の対応に追われ、余裕のない状況に陥っていた教員が多く生じていた。

また、健康スポーツ科学科で履修すべく実習や実技は遠隔のみで授業をおこなうということについての限界が大きく、対面授業の併用を希望する担当教員も少なくなかった。

こうしたことから、授業の対応は随時修正検討を重ねて展開するように図った（図1）。

4月末から5月初旬にかけて授業方針は以下の通りであった。

- ・前期授業は夏季休暇期間を含む前期内にできる限り終了することを目指す（通常は夏季休暇前までに終了するが、夏季休暇期間も授業を必要に応じて実施する）。
- ・「講義科目」は、引き続きオンデマンドで継続配信する。
- ・学科新設で初めての卒業生を出すことから前例がないために、卒業・就職に向けた4年生対応を優先しておこなう。
- ・「講義以外の科目（演習、実習、実技、実験実習）」は部分的に遠隔授業を導入するとともに、夏季休暇期間を含めた前期終盤での集中授業を必要に応じて実施する。
- ・「ゼミ、卒業研究」は遠隔授業。zoom等活用したリアルタイム授業、個別対応による授業方法を検討する。なお、遠隔授業（「講義以外の科目」に対する対応を円滑に進めるため）の実施に向けた教員の以下の作業チームを編成した。

①収録編集チーム（実技、実験実習の収録編集のスケジュール作成と収録編集）

②オンライン授業チーム（ゼミ関連科目に対する導入、研修、運営）

③定期試験方法チーム（レポート及びオンライン試験への対応）



図 1 本学科前学期授業の今後の流れ (第 2 回学科会議資料 2020/05/08 付より抜粋)

④情報処理、情報発信対応チーム (遠隔授業に関連した情報処理、情報発信に関する対応)

各チームがスケジュールに沿って役割を果たし、演習、実習、実技、実験実習の科目は、準備期間を考慮して遠隔授業動画配信を 1 か月後の 5 月 18 日から開始した (図 1)。

上述のように、学長による新型コロナウイルス感染症の拡大防止に対するメッセージを受けて、大学では遠隔授業を中心として前学期の授業が開始されたが、本学科の学生は北海道から沖縄に至る全国の地区から集まっており、緊急事態宣言中は大学のコロナ感染対策としてキャンパス内施設の利用制限を行う中で、合宿所や宿舎がクローズしたために、学生の大半は出身地や保護者のところに戻る形となり、大学から離れた遠方で前期の遠隔授業を受けることから始まった。また留学生の中には、帰国し、日本に戻れない状況も生じた。このように遠隔授業を受講する場が、帰省先等になったことにより、それぞれのネット環境が大きく異なるという状況が生じ、学生の受講状況の把握や教員と学生のコミュニケーションが一様でないために授業実施において大きな支障が生じていたことも否定できない。

2020年5月29日

2020年度前学期授業について

現在、保健医療学部健康スポーツ科学科におきましては、4月20日(月)から講義科目、5月18日(月)から講義以外(実技、演習、実験実習)の科目が遠隔授業で実施されております。

5月20日の新型コロナウイルス感染防止に対する大学方針(第3報)を基に、今後授業対応について、以下の日程で講義科目は前学期期間遠隔授業、講義以外の科目は一部対面授業を取り入れ実施することといたします。

なお、今後の前学期の授業及び試験の方針と実施の詳細については下記のとおりです。

1. 方針

2020年度前学期授業について、学生の健康・安全面を最優先としつつ、学修時間やその機会の確保、教育の質の維持を図るため、次のとおり対応を図る。

1) 対面授業の開始日(健康スポーツ科学科)

2020年7月6日(月)以降、随時実施

遠隔授業のみでは教育効果が得られない授業科目について、必要に応じて実施する。

本学科では、体育実技や実習科目が多いことから、「3つの密(密閉空間・密集場所・密接場面)」を回避したうえで、必要に応じて小規模に実施することとする。なお、授業開始日までの2週間の行動確認を徹底する。
※6月中に、帰省先からアパートへ戻り、経過観察を実施する。

なお、7月6日に学年別に授業再開に向けてガイダンスを実施予定。

図2 本学科前学期授業の今後の流れ
(第3回学科会議資料2020/06/12付より抜粋)

次に、政府は5月25日に「緊急事態宣言」を解除した。このことにより本学科は5月29日に、演習、実習、実技、実験実習科目の残りの授業を7月6日から対面授業を実施可能とすることを決定した(図2)。この対面授業は、いつまで続くかわからないコロナ対応のための授業方法について、今後の対面授業の目途を立てる貴重な機会として位置付けた。本授業実施に当たっては次の2点を徹底した。

- ・マスク着用、授業開始前検温、授業前後手指消毒、教室入れ替え前後で使用物消毒を徹底する。
- ・室内での授業は受講生を2つに分け(密度によるが)、前半と後半で入れ替えて半分を対面、残り半分を課題学習として授業を実施する。なお、環境条件(屋内外)や、実技特性(接触有り無し)により申し合わせにとられないで実施可能とする科目もあり、担当者の判断に委ねる。

こうした遠隔と対面での併用授業の展開も図り、夏休みを含めた前学期間において、予定された全授業(半期15回の授業)を終了することができた。

Ⅲ. 2020年度ハワイ大学マノア校の授業について

2020年1月下旬より、アメリカ合衆国では本土ワシントン州を皮切りに、イリノイ州、カリフォルニア州、アリゾナ州と感染が拡大していった。ハワイ州においては太平洋で孤立しているという地理的要因もあり、第一感染者が報告されたのは本土で確認されてから約2ヶ月後の3月6日で、全50州中49番目であっ

た（最後はアラスカ州）。感染経路としては、ハワイ州では「離島」と位置付けられるカウアイ島から始まり、マウイ島、ハワイ島と感染が確認され、ハワイ大学マノア校のあるオアフ島ホノルル郡でも感染者が報告されて以降、州内感染者数は増加の一途を辿った。一気に緊張が高まった 3 月初旬の時点は、ハワイ大学では春 semester の中旬に差し掛かった時期であった。本土より徐々に魔の手が忍び寄り、州内感染者がいつ出てもおかしくない、という不透明な状況の中で、オンライン主体の教育に移行する準備が水面下で早急に進められた。具体的には、ハワイ大学オンラインイノベーションセンター（UHOIC）が「Teaching Online During an Emergency（緊急時にオンラインで教えるために）」を立ち上げるなどし、ハワイ大学システム全教員に対してオンライン移行準備においてサポートシステムの構築を図った。そのような状況の中、スプリングブレイク（春休み）に差し掛かるタイミング（3 月 12 日）で David Lassner ハワイ大学総長より、「ハワイ大学全学生、教職員の健康とコミュニティの安全を最優先し、スプリングブレイク明けの 3 月 23 日 月曜日より全クラスをオンラインに移行する」との正式な決定が発表され、さらに時を同じく David Ige ハワイ州知事より、3 月 25 日から 4 月 30 日まで「Stay at home, work from home order（自宅待機・在宅勤務命令）」が発令された。これにより、違反者には罰金最大 5000 ドル及び 1 年以下の禁固が下されるという厳しい規制が州全体に敷かれ、ハワイ州はロックダウン状態に入った。Semester 途中に起こったこの未曾有の事態に混乱しながらも、教職員や学生はスプリングブレイク後に完全オンライン教育への切り替えを即座に決行することになった。

教育学部に属する Kinesiology & Rehabilitation Science（KRS）学科では、Nathan Murata 教育学部長と Christopher Stickley KRS 学科長の指揮のもと、学科教職員にコロナ対策の方向性の統一化を図った。ハワイ州では、教育従事者は「エッセンシャルワーカー」に区分され、自宅待機・在宅勤務命令中もオンライン授業で必要な教材やテクノロジーを使用するため、もしくは取りに行くためにキャンパスに向かう上での「外出」は許可されていたが（6 フィートのソーシャルディスタンスとマスク着用した上で）、対面授業は特別なケース以外（後述）禁止する方針を固め、教職員に伝えられた。2020 年のスプリング semester にオフアールされている学部レベル 37 授業（78 セクション）、大学院レベル 11 授業（11 セクション）のうちの大多数が身体を使ったアクティビティ（例：バスケットボール、バレーボール、スイミング、ヨガ、エアロビクス、ウェイトトレーニング等）、ハンズオンラボ（例：上肢評価法、運動生理学、バイオメカニクス、救急救命法等）または現場実習（例：体育教育法、アスレティックトレーニング現場実習等）など、対面式の要素を含んでいた。学部長、学科長の方針では、「アクティビティやハンズオンの要素を含む授業に関しては、オンラインで実施が可能な課題（例：レポート作成、アクティビティログ、実際のアクティビティのビデオ撮影等）に切り替えること」とされていたため、各教員が授業単位でそれぞれシラバスに記載されているコース目標に従いながらも独創性を持って方向転換、代替案を模索していく必要があった。

授業のプラットフォームとしては大学のオンラインポータル、Laulima（ラウリマ）を引き続き使用し、シラバスやスケジュールの管理、クイズや試験の作成と実施、課題の提出、ディスカッションボードやメールを通しての学生との交流が行われた。さらにリアルタイムの講義においては教育学部の全教員に Web 会議システム「Zoom」の教育用アカウントが割り当てられ、時間や参加人数に制限されることなくサービスを利用することができ、スムーズに同期型の講義ができるようになった。また Laulima、Zoom や Google の各種サービスなどのオンラインプラットフォームの使用法やテクニカルサポートに関しては教育学部の IT サポートチームが率先して、教職員のための様々なサービスの提供に尽力している。前述の対面授業の「特別なケース」を実施するにあたり、KRS 学科長発のリクエスト申請という形で教育学部長を通してハワイ大学マノア校学長の承認を得る規程になっている。実際に KRS 学科においてアメリカ心臓協会（AHA）の心肺蘇生法と応急処置の資格（Heartsaver）が取得できるオプションがある救急救命法の授業でその特別な措置が春 semester の期末試験中に実施された。資格授与には実技が必須なため、資格取得希望学生にのみ米国疾病予防センター（CDC）のガイドラインに準じ、十分なソーシャルディスタンス、マスク着用、施設と使用器具（CPR マネキン、練習用 AED 等）殺菌消毒など適切な対策を取った上での対面実技（一対一）を行った。

春semester中に急な転換を強いられた中においても、春semester以降に迫る夏セッション（5月末から8月中旬までの2タームの6週間集中学期）と秋semester（8月下旬から12月初旬までの16週間の通常学期）のプランニングも同時進行させる必要があった。コロナウィルスによるハワイ経済への大打撃は州立大学であるハワイ大学を直撃する形になり、大幅な予算削減や人員削減が大学全体で行われる中、まずKRS学科はアクティビティ主体の授業を極力削減する必要に迫られた。春semesterに23セクションあったアクティビティ主体の授業は、6セクションに縮小され（この6セクションも全てオンライン）、外部講師との契約も打ち切りを余儀なくされた。さらに2020年秋semesterから、KRS学科全教員が、通常より1セクション（3単位）多く授業を負担する方針になった。今後はハワイ大学教職員を含む州職員の一時帰休による給与削減も州議会で議論されている。結局、前述した州知事による4月30日までの自宅待機・在宅勤務命令は、5月末までの1ヶ月間延長を余儀なくされ、さらにその後もコロナの増減に伴って州と郡単位での規制が一進一退し続ける中、現在春semesterからの方針を継続し、11月中旬の時点の現在においてもKRS学科では原則オンラインでの授業が展開されている。その影響で、9月に予定されていた朝日大学の短期留学プログラムを含む、日本の提携大学の短期研修は全てキャンセルに追い込まれた。

KRS学科所属の筆者二人がプログラム教員を務める大学院レベルのアスレティックトレーニング(AT)プログラムにおいても厳しい運営状況が続いている。2020年の春semesterで大学がオンラインに移行するタイミングで、ハワイ大学のスポーツイベントを全てキャンセルする決断が下された。大学のみならず、ハワイ州の高校のスポーツプログラムを統括するハワイ高校アスレティック協会(HHSAA)スプリングスポーツの全面キャンセルを決定した。さらに連携する近隣の病院やスポーツメディシンクリニックも学生の受け入れが不可能になった。これらの決定により、連携する大学、高校、病院において、プリセプター(監督官)の元での1200時間以上の現場実習をカリキュラムの軸としているハワイ大学のATプログラム学生は現場実習の機会を完全に奪われる形になってしまった。しかし、オンラインに移行したスプリングブレイク前の時点で、大学院2年生に関しては卒業に必要な実習時間1200時間は全員修了していたので、オンライン移行後もZoomにおいて同期型の講義やケースディスカッション等を中心に授業を進め全8名が全課程修了、卒業するに至った。

2020年11月現在、在学生9名、及び新コホートの学生10名の計19名が秋semesterにおいてプログラムに在籍している。講義に関しては完全に同期型、非同期型のオンライン形式で進めているが、怪我の評価法や徒手手技の実践授業は、「ATラボやKRS教室を使用する上でのCOVID-19ガイドライン」を作成し、学部長の承認を得ることで「ハイブリッド」授業として公式に認定され、限定的ではあるが対面式授業が可能になった。なお上記のガイドラインの概要は以下である。

1) 事前スクリーニング

- a) 大学指定のアプリ「LumiSight」で症状チェックをし、安全と判断された物のみ来校する。もし少しでもコロナに関係する症状がある場合はプログラムに報告し自宅待機、もしくは保健機関に相談する。

2) キャンパス到着後

- a) 教員は教室のドアノブ、トリートメントテーブル、授業で使用する器具の殺菌をする。
- b) 指定の授業時間前まで教室前で待機し、その際は生徒間でマスク着用、6フィートの距離を厳守。
- c) 教員が一人ずつ検温を実施。華氏100.3度(摂氏38.9度)ある場合は入室が許可されず、保健機関に送る。
- d) 許可された生徒は、プログラムで用意したフェイスシールド、手袋、手術用マスクを着用。
- e) 担当教員は学生の体温、入退室時間をエクセルに記録(感染確認時の感染経路を明らかにするため)

3) 授業中

- a) ドアノブを開放し換気をする。
- b) 直接手技を生徒同士で練習する時を除き、6フィートのソーシャルディスタンスを保つ。
- c) グループを最大5人とし、グループごとに時間もしくは教室を分けること。グループメンバーはセメ

スターを通して固定することで生徒間のコンタクトを限定する。

4) 授業後

- a) 担当教員はドアノブ、使用器具、テーブル等を消毒。部屋全体の殺菌清掃は学科委託の清掃員が、予め提出したスケジュールにしたがって毎回行う。

以上のガイドラインをしっかりと守ることで、2020 年秋 semester において感染者を出すことなく授業を行うことに成功している。

8 月当初は春までの延期を決定していたハワイ大学アメリカンフットボールチームは、マウンテンウェストカンファレンス予定変更に伴い、今秋に 8 試合限定でのシーズン参加を決めた。この決定により、AT ルームのオペレーションが再開し、AT 学生の現場実習機会も少しずつ戻ってきた。しかし、実際にアメリカンフットボールチーム内でコロナ陽性者が確認される事例もあり、十分に注意しているとはいえ「密」になり得る状況で学生に危険がないとは言い切れない。よって、現段階では現場実習は必修ではなく「オプション」として扱っている。家庭環境や健康上の理由で、現場実習はまだ始められない学生のために、現場実習の代わりになる機会を作り出す必要があったため、プログラム教員と連携高校のプリセプター協力の元「バーチャル AT クリニック」を立ち上げた。これは Zoom を通してプリセプターが提示するシナリオを基に一对一で「問診」の練習をしたり、評価法や治療法などのディスカッションをする機会を学生に与えるというものである。これにより、現場実習が出来ない学生に、在宅しながらも複数のプリセプターと接する機会を提供し、さらに問診やコミュニケーションの技術向上へと繋げていくものと期待している。

コロナ禍において実習経験が著しく制限されている AT 学生に活力を与えるという取り組みに関して、「臨床教育ユニット」の提供があげられる。これはハワイ州から一番近いカリフォルニア州にある、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校、ロングビーチ校、フラートン校の AT プログラムと連携し、4 大学間において大学の垣根を超え、それぞれの教員の専門分野を生かした多様性のある講義を AT 学生限定に発信するというものである。他大学の AT 教員からの講義を聴いたり、他プログラムの学生とも交流が持てる環境を提供することで、少しでも学生に刺激を与えモチベーションの低下を防ぐきっかけになればと願っている。

2020 年春 semester 終了時の AT 学生の授業評価アンケートにも「対面で直接学ぶことのできないオンラインのみの授業は自分の学習スタイルと合わない」や、「アスレティックトレーナーになるために必要な手技練習や実技が出来ていないのが不安」などの声上がり、医療従事者を目指す学生にとって厳しい状況が続いている。しかし、2021 年春 semester（1 月初旬）よりハワイ大学スポーツの継続と、ハワイ州内の高校におけるスポーツ活動の再開（アメリカンフットボール、レスリング、サッカー、野球など）が予定されており、AT 学生のみならず教員を目指す教育学部の他学科生にとっても現場実習の機会が拡大されることが大いに期待されている。一方で、このコロナ禍において、テレヘルス（遠隔医療）やテレコミュニケーションの需要が一気に加速したことで、医療従事者や教員を目指す教員や学生はこれを好機と捉え、状況を見極めた上で今できること、学べることを模索して実施していくことになる。KRS 学科では、今後もコロナ禍で学んだ遠隔形式の利点をさらに生かしながら更に質の高い教育を提供し、医療や教育の現場で活躍できるプロフェッショナルを育成していくことを目指す。

IV. スポーツ科学における遠隔授業の問題点と今後の対処

健康スポーツ科学科は、運動やスポーツを実践することを基本とする学科であり、これまでに授業の展開を示したが、遠隔のみで実技や実習の授業を展開することは大変難しく、対面での授業でなければ成立しないというものも存在する。

同様に、ハワイ大学 KRS 学科においても対面授業や実践的な現場実習を通して AT の教育プログラムを提供することが本来的な姿である。先の見通せないコロナ禍で、教育の質を担保し、できる限りよい授業が提供できるように努めることが肝要である

今回の両大学あるいは両国の大学における新型コロナウイルスの感染リスク軽減のための取り組みは互いに参考になるものが多い。

いずれも対面授業では、基本的感染防止対策として

- ・マスク着用
- ・検温
- ・手指消毒
- ・使用物品の除菌
- ・換気
- ・授業実施方法（受講者数、時間など）の工夫を徹底している。

この点は今後も長期に維持していく必要がある。これまでには、幸運にも授業で一人の感染者を出すことなく前学期科目の単位認定までを無事に済ませることができた。

遠隔授業に対する教員の意見は、以下のようなものであった（表1）。

表1 健康スポーツ科学科教員会議での前期遠隔授業を振り返っての意見

<p>講義</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 総体的にはオンデマンド方式（いつでもどこでも見れる）は良かったと思う。 2. 学生にフィードバックして授業を展開する上ではアップの期限等曜日によって異なるが負担を感じた。自由にアップできる方が良い。 3. 学生の受け手側に携帯保有者のみが多く、パソコン等の必携化を望む。あまりにも学生の受信環境がよろしくない。 4. 後期についても遠隔の実施が望ましい（教員の健康管理も重要であり、密回避のみで授業を対面と遠隔に分けるのが困難では？）。 5. 研究室によってもインターネット環境が悪いところがあり、学生が戻ってきてても学内のLAN等の整備がさらに求められるのでは？ 6. ムードルの活用については、資料提示や配信という点では容易であるが、学生との対話や学習状況の把握等については遠隔（オンデマンド方式）の前期の方法では工夫が必要 7. 動画の配信する時間（午後3時一斉配信）を早めて欲しいという学生の意見は尊重すべきであり、また1週間の配信期間も見直すべきである。15回全部いつでも見られるようにできれば越したことはない。 8. 非常勤講師が8階遠隔動画作成のためのスクジオを利用して資料作りを凶っているが学科内に会場を設置してより使いやすい形（現在は矢守、曾我部先生に動画エンコード化、配信までの対応を基本依存しているが）で関係者の負担を軽減してできないものか？（途中から事務室からの配信に変更された）。 <p>実技、実験、実習</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実技等での遠隔は、過去に経験のない状況であり、スポーツ種目や講義内容によってこれで授業が成立するのかという疑問を持ちながらも努力した。 2. 陸上競技などを例に挙げると、バトンリレーも授業内容には含まれているが、これは遠隔ではできない。グラウンドで行うことを考えれば密の回避できるが施設がない。 3. 水泳も同じで水のない中で指導方法と技能を高めるには無理がある。 4. 器械運動を15回遠隔で行うことは可能であり、指導方法などについては学習できるが、技能の点検チェックを考えると数回の対面は不可欠。しかし、体を触る（補助を行う）ことがあるので手袋等コロナ対策が重要である。 <p>健康スポーツ科学科として後期への授業の希望</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 遠隔授業の継続を実施して欲しい一教室で密を避けられない。 2. 実技等は、密の回避を考えながら、工夫して授業を行うが、遠隔と対面の併用が必要 3. 遠隔に対する整備（前期と異なり、早い時期からの授業展開の決定と対応が必要）上記の前期授業での振り返りを元に要検討 <p>対面に対する整備（教室または運動施設でのコロナ対策が必要）アルコール、手袋、マスク</p>

さらに、遠隔オーガナイザーの矢守教授により学生に対して全学的に学生の遠隔授業に対するアンケート調査が実施された。その結果から、オンデマンド形式の配信により自分のペースで視聴できて理解しやすいことなどのメリットが報告された。この遠隔授業の活用で対面式のこれまでの方法に加えて、授業テクニックの幅に広がり期待できるものと思われた。そのほか詳細は割愛するものの、およそ満足できる結果も得られていたが、PCあるいはスマホで毎日配信される授業の動画を長時間視聴し課題をこなすことは、学生にとって精神的、肉体的なストレスが大きく苦痛であること、実技、演習、実習、実験などの科目の対面であれば成立せず、動画配信は十分な教育効果が得られない内容に限界があることなど無視できない遠隔授業のデメリットも報告された。

また、学生の大半が携帯電話のみしか保持しておらず、パソコンなどを使えない、または使ったこともないとみられることが明らかとなり、この点は対面授業においてもパソコンの持ち込み資料閲覧やパソコンをノート作成に日々使用しているハワイ大学の学生とは授業の体制が大きく異なること、また他学部他学科の学生とも違っており、本学科学生に対してはパソコンの必携化についての検討が求められる。

一方、経済状況の悪化とともに遠隔授業に対する大学進学の意味を見出せない学生たちの退学希望が増え、社会問題となっていることが指摘されている¹⁾ ことに鑑みれば、感染拡大状況にもよるが、単に遠隔授業で急場を凌ぐというやり方はもはや通用しないと云わざるを得ない。

文部科学省²⁾ は、6月1日現在で全国の大学等の9割(1066/1069校)が授業を実施していたが、その6割が遠隔であったことを発表している。また、後期等の授業の実施³⁾ は、ほぼすべての大学が対面授業を実施し(1054/1060校)、うち8割が対面と遠隔を併用することを予定していることを発表している(表2)。

現在、遠隔授業と対面授業を併用しながら後学期の半ばに達している。感染拡大状況の変化に対応できるよう備えつつ、コロナ禍でもより学生に評価される授業の提供を目指して種々模索しながら日々の授業を

表2 大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果
(地域別)(令和2年10月2日、文部科学省発表資料より抜粋)
https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00016.html

1. 後期授業の実施形態について

	全面对面	対面・遠隔併用	その他*
全国の状況	19.3%	80.1%	0.6%
北海道・東北	33.9%	65.3%	0.8%
関東	8.8%	90.3%	0.9%
中部	21.0%	78.5%	0.5%
近畿	15.2%	84.8%	0%
中国・四国	33.0%	67.0%	0%
九州・沖縄	25.4%	73.7%	0.8%

※その他は、「対面授業の実施を検討中」と「全面的に遠隔授業を実施予定」であるもの。

2. 対面授業・遠隔授業を併用する場合の両者の割合について

	ほぼ対面	7割対面	ほぼ半々	3割対面	ほぼ遠隔
全国の状況	20.4%	11.1%	25.0%	24.6%	19.0%
北海道・東北	40.5%	15.2%	19.0%	21.5%	3.8%
関東	10.8%	7.7%	18.9%	30.0%	32.7%
中部	22.9%	12.4%	32.0%	19.0%	13.7%
近畿	17.3%	16.0%	31.5%	22.8%	12.3%
中国・四国	39.4%	8.5%	23.9%	15.5%	12.7%
九州・沖縄	20.7%	9.2%	27.6%	29.9%	12.6%

行っている。授業の質の確保とともにアクティブラーニングが求められる今日、学生の主体的な学びを導く教育、授業システムの開発と展開が求められ、創意工夫しながら一層の改善を図りたい。

引用文献

- 1) 高等教育無償化プロジェクト FREE (2020) 新型コロナ感染拡大の学生生活への影響調査.
<https://s3-us-west-2.amazonaws.com/jnpc-prd-public-oregon/files/2020/05/f45e4e80-bc34-49ba-9d38-1e80a0e6e429.pdf> (参照日: 2020年11月4日)
- 2) 文部科学省 (2020) 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況 (令和2年6月1日時点). https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf (参照日: 2020年11月4日)
- 3) 文部科学省(2020)大学等における後期授業の実施方針の調査について(地域別状況)(令和2年10月2日).
https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf (参照日: 2020年11月4日)